

言っていたが、願いが叶うことはなかった。

心臓を患っていた母には、敗戦後の大連での生活はどうい堪えられるものではなかっただろうし、敗戦の直前に亡くなったことは、本人にとつてはむしろ幸せであつたと思うが、今こうして故国の山々を遙かに望んでみると、母が隣にいてくれたらと思わずにはいられない。

ああ、母を満州に置いてきた。何もかも置き去りにして私たちだけが帰って行く後ろめたい気持ち、さみしさをひしひしと味わっている。

久しぶりに青空が広がり水平線に浮かぶ緑濃い大地は、紛れもなく私たちが上陸する故国日本である。九州から西側を回り、あと数時間で佐世保に上陸するだろう。

船腹に当たる波音が、せわしく何かを語りかけてくる。海いっばいのさざ波が、夕日を照り返して眩しい。

吉林で終戦を迎えて

静岡県 仲野 美幸

一 私の生い立ち

私は家庭の事情で、生まれてからずっと愛媛県の今治市外で、父方の祖父母によつて育てられました。それは、まだ頑是無いころに生母と死別したからです。実の母親の顔も知らないままに育っていました。祖父母の寵愛を一身に受けて、何の不自由も不安も無く毎日楽しく平和に過ごして、昭和十四（一九三九）年三月に市内にあった今治高等女学校を卒業しました。そして卒業を待っていた如くに、当時旅順に在住していた両親から、こちらに来るようにと言われて、いや応無しに呼び寄せられて、旅順に旅立ちました。

そのころは、父親代わりとなって温かい慈愛を受けていた祖父は亡くなっていて、祖母一人でし

たので、私が旅順に行くのと、祖母は一人ぼっちになつてしまうのですが、そんなことは考えもせず
に両親の言いなりでした。

年離れた祖母は、私が女学校に通う四年間もの
長い間、朝暗いうちに起きて私のためにお弁当を
こしらえて、一緒に通学する友達の家まで送つて
もらう毎日でした。さぞや、これからのことを思
い、寂しい気持ちで私を送り出してくれたことだ
ろうと、自分が年を重ねて祖母の年に近づくに
従つて、当時の祖母の胸の内を察すると、つまつ
てくるような切なさに駆られるのでした。

旅順に行つても、それまで一緒に生活したこと
の無い父や義母や、そして初めて会う妹、私が来
るまでは、それこそ親子三人水入らずの平和で、
楽しい家庭生活であつただろうと思うと、私がそ
の中に入ることは生活を壊すことになるかと、胸の
うちでは悶々としていました。

日本の内地でも外地でも、東亜の情勢はだんだ
んと緊張の度を加えてきて、「滅私奉公」とか

「二億総決起」の激しいスローガンが巷にあふれ
ている時代ですから、どこにも勤めずに家で遊ん
でいる人に対しては、世間からは白い目で見られ
る時代環境でした。さりとて、自分に適した働き
場所がすぐに見つかるわけは無く、ましてやまっ
たく状況も分からない外国ですので、随分と気苦
労をしました。

そんな折に、義母の知り合いで海軍関係に勤め
ている人の口利きで、その当時、特命全権大使と
して旅順に来られる、永野修身海軍大将のお世話
を一週間ばかりすることになり、旅順水交社に通
うことになりました。

私の仕事は、大将のおそばで、お食事のことや
その他の雑用をすることでしたが、田舎出の私に
とってはすべてが初めてのことばかりで、緊張の
連続だつたうえ、その豪華さには驚きでした。女
学校を終えて間もない一介の少女が、海軍大将と
直接お話をするなどということは、思つてもみな
かつたことでしたが、今になつても忘れられない

に嫁には出さない！」と、機嫌の悪い顔をして断るようにはしていません。

二 新婚生活

そんなときに、思い掛けない良い縁談がきました。それが夫との縁談話です。私も十九歳になっていましたが、結婚ということに対してはまだ真剣に考えることは無く、タイプリストとしての仕事を毎日楽しくやっていました。夫となる人は、私の家の前にあった日満商事旅順支店に勤務していて、我が家の者とも顔見知りでした。家は歯科医院で、父親は旅順の歯科医師会長を務める格式のある家であることも知らされました。私は田舎者で、女学校を終えるまでは年寄りに育てられていて何も分からず、立派な家に嫁いでも嫁としての務めはとてできないと考えていました。

しかし、伯父の会社の上司の方からも再三となく話があつて、とうとう説得されてしまいました。嫁としての心構えも見識も無いままに、結納を交わしました。

さあ大変。それからは、少しでも家庭生活に役立つようにと、お花と裁縫を真剣に習いました。周囲の人々によって結婚式の準備も着々と進み、昭和十七年五月二十八日に式を挙げました。

気丈な姑からは、「家のことはすべて長男の嫁として覚えてほしい」と言われて、家事全般についてひとつひとつ教えられました。両親と弟二人、そして病院の手伝い三人と、家事手伝いの人、それに私たち夫婦と総勢十人の大所帯の世話をすることとなりました。毎回の食事の仕度だけでも大変な仕事でした。米一升を洗うときの手が痛かったことは、死ぬまで忘れられないことです。

半年ぐらい大所帯での生活をやつて、家事全般が分かるようになってから、私の実家近くの社宅に移ることができて、やつと新婚気分浸った生活になりました。日々の気遣いも無く緊張から解放され、ほっとした気持ちになりました。

そんな気持ちの生活となつて間もなくの昭和十

八年三月十日の早朝、予定日より早く陣痛が始まり、また別の意味での慌ただしい生活となりました。夫は慌てながらも、風呂を沸かしてくれていました。沸かしながら「今日は三月十日の陸軍記念日だから、きつと男の子だろう！」と言つて、はしゃいでいました。すぐに病院に入り、三時間ぐらい陣痛の苦しみと闘いました。出産の喜びも大きいものでしたが、この苦しみもまた大変でした。やっと新しい命が生まれましたが、夫には期待外れで女の子でした。五体満足で元氣のよい泣き声を出し、それまでの陣痛の苦しみを吹きとばしてくれました。

実家でも、元氣な初孫が生まれて大喜びでした。産着を二枚も贈ってくれました。慣れない育児に戸惑いながらも、幸福をしみじみ感じる毎日をごしていただきました。

三 赤子を抱えて吉林へ

平穩のうちに赤ん坊中心の生活が続いているとき、突然夫が吉林支店に転勤を命ぜられ、ただだ

だ驚くばかりでした。旅順以外はまったく未知のところですし、吉林についても、ただ遠いところというだけしか知りませんでした。遠い見知らぬ土地で、どうすればよいのか、どうなるのかなど心細い思いで落ち着きませんでした。

夫は、取りあえず単身で出発しました。今でいう単身赴任です。しばらくは別れ別れの生活でしたが、旅順は実家もあり夫の家族もいるので何の心配もなかったのですが、これからの吉林での生活を思うだけで、夜も寝付かれませんでした。

そのうちに、夫から社宅として民家を借りたので、こっちに来るようにとの連絡が入りました。赤ん坊を抱えて吉林市に向かって旅順を出発しました。

当時の交通事情は今と異なり、列車の旅も長時間同一列車に乗つての長旅ですので、赤ん坊連れでは大変な苦勞でした。ただ、その旅の苦しみを救ってくれたのは、夫のいる吉林とはどんな街だろうかと考える想像することだけでした。

やっこのことで吉林駅に着きましたが、吉林は省庁の置かれている都市だったので、駅舎も立派で大きなホテルもあり、ちよつとだけ安心しました。荷物も会社の方たちがきちんと整理をしてくださつて、家の中も片付いていて大助かりでした。しかし、明日からの食べることなどはどうすればよいのか、だれ一人知っている人も無く、西も東も分らない街で過ごすことへの不安感はやはり大きく、落ち着きませんでした。

しかし現実には相反していて、社宅も駅の近くで、満鉄の購買部もあり食料品や衣料品が豊富に並んでいました。これは旅順でも無かつたことで、何より嬉しいことでした。当時は、既に煙草だけは切符制になっていて、主人のために子供を背負つて並んで買ったことを記憶しています。

そのうちに日が経つに従つて、だんだんと市街の様子も分かつてきました。一番に幸いだつたことは、社宅のお隣に、満鉄病院の小児科の女医さんがその父親と住んでおられたことで、子供をよ

くかわいがつていただきました。女医さんを知つたというところで、心丈夫になつたのか、赤ん坊もあまりお世話になることも無く、健康にすくすくと育つていました。

私は吉林で、二番目の子供を生むことになり、早速実家に知らせますと、みんな大層喜んでくれました。

吉林にも夏が訪れましたが、夜になると少し肌寒く感じ、旅順よりは気温が低いようでした。社宅の向かいには国際運輸の社宅もあつて、その方々とも親しくお付き合いをするようになりました。社宅の裏手には割合に広い空地があつて、会社の使用人の現地民が畑を耕してくれていて、作物がよくできるので、我が家だけでは食べきれずに近所にもお裾分けをしていました。

日が経つにつれて、そろそろ悪阻つわりを感じるようになり、良い産婆さんを紹介されて体調を診てもらい、いろいろとアドバイスを受けました。吉林に肉親のいない私にとつてあまり不安を感じるこ

とも無く、胎児も順調に育っていました。

吉林市街にも慣れると、日曜日などの休日には、馬車に乗って北山公園などにも遊びに行きました。子供も大喜びをしていましたし、帰りにはホテルのグリルで食事をすることもあって、少し贅沢でしたが楽しくもありました。

再び、寒い寒い冬が近付いてきました。卵とかジャガイモなどは、すべて凍ってしまい、早い時間から暖房の効いた部屋に出しておいて調理するので、手間が掛かりました。外出のときは、耳を出していると凍傷にかかるので、絶対に気を付けることでした。

第二子の出産予定は三月でしたので、予定日が近くなると、満鉄購買部で必要な品を買い集めて、早目に準備をしました。しかし家でのお産は初めてなので、随分心配しました。長女も三歳になったばかりで、まだ一番手のかかるときでしたので、旅順の義母に手伝いに来てもらうことになりました。

義母も旅順近辺しか知らないもので、吉林までの旅は随分と心細かったと思います。

昭和二十年三月二十日の早朝に陣痛が始まりました。お産婆さんに連絡をとってもらおうとすぐに飛んで来て、準備を始めました。お昼近くに、元気な産声で女の子が生まれました。安産でしたので、みんなして喜び合いました。

まだ寒い時期でしたが、義母は三十日ほど手伝ってくれました。せっかく遠い所で、しかも未知の吉林まで来たのに、どこにも案内することもできずに、そのまま旅順に帰りました。「暖かくなったら、また来るよ！」と言っていました。敗戦を迎えてとうとう実現せずに終わってしまいました。

四 終戦前後のこと

二人の幼子の世話で、若い母親は天手古舞の忙しい毎日を過ごしていましたが、吉林は激しい戦局の影響も受けずに平穏な毎日で、次女もよく飲みよく眠り、よく肥えて順調に成長していました。

た。このように平和な家族四人の生活も、ある日突然に崩れてしまったのです。

七月の半ばに、まったく寝耳に水の如く、夫に召集令状が来たのです。国策会社の社員のため召集は延期されていて、あまりそのことについては考えていなかったことなので、本当に驚きました。

夫は、よくラジオや新聞で、支那や南方での戦いの様子を見聞きするたびに、自分にも召集が来るといいなあというようなことを言っていました。しかしそれは、召集は無いという考えのもとで気楽な気持ちで言っていたことであって、それが現実には赤紙を手にしたときには、さすがに手が震えていました。

戦局がだんだんと厳しくなってきたことは、私にも薄々分かっていましたが、召集猶予になっている人々にも召集令状が来るほどに緊迫しているとは、思ってもいませんでした。会社の若い人五人にも召集令状が来ていました。

夫も、お国のためだと覚悟を決めて、力いっぱい元気な顔を見せて出征して行きましたが、内心では見知らぬ土地に妻と幼い二人の子供を残して家を出ていくことには、随分と悩んでいたようでした。

私も、これから先のことを考えると、不安な気持ちで毎日を過ごしていましたが、まだ日本が負けるなどということは毛頭考えることも無く、いよいよ寂しくなったならば、旅順に帰ればよいという思いもあって、吉林での生活を続けることになりました。

毎日、戦況に耳を傾けながら夫の無事を祈っていましたが、夫からは家を出てから一度の便りもありませんでした。

八月九日、暑い夏の夜に、突然ソ連軍の飛行機による空襲が始まりました。吉林市街の空は、ソ連機の投下する照明弾で真昼のような不気味な明るさが続き驚いて、急いで家の窓を全部閉めて、二人の幼子を両腕に抱えてうずくまっています。

た。

それからは毎日のように空襲がありました。ソ連軍が「日ソ不可侵条約」を一方向的に破棄して、多方面から満ソ国境を越えて満州国内に侵攻を開始したことを知りました。組長さんから防空壕に入ることをすすめられましたので、毎夜防空壕内で過ごす日が続きました。子供二人を一度には連れ出さずに、ひとりひとり抱き抱えて防空壕に入りましたが、本当に命懸けでした。

そのうちに、国境近くにいた開拓団などの人たちが、防空頭巾を覆り身の回り品を詰めたリュックサックを背負い両手にも鍋釜などをさげて、あるいは子供の手を引き疲労困ぱいの様子で南下して来て、そのうちの一部の人たちは、社宅の裏手にある料亭に、集団で住むようになりました。自分の住まいにいる私たちを、羨望の目で見ながら通っていました。

それから数日経った八月十五日に、夢のような気持ちで重大放送を聞きました。雑音が大きくて

内容はよく分かりませんでした、それでも日本が負けたということは薄々分かりました。日本は絶対に負けないと信じ切っていましたし、日本は神国で神様が守ってくださいさるから、負けるということなどは考えてもいませんでしたので、玉音放送を聞いていて茫然自失の体で、そのまま立っていることもできずに、へなへなと座り込んでしまいました。すると、途端に涙が止めどもなく流れてきました。

少し気持ちが落ち着くと、今度は「さて！ 私たちはどうなるのだろうか？ 子供二人をどうしたらよいだろうか？」という不安な気持ちが込み上げてきました。

我が家のラジオで、重大放送を外に立って聞いていた開拓団などの避難者の人々も、みんな目を真っ赤に腫らして呆然としていました。「どうぞ家の中に入って、お茶でも飲んでください」という心遣いの言葉ひとつもかけることができなかったことが、今でも口惜しくて心に悔いを残してし

まいりました。

毎晩のように、子供二人を連れて防空壕に逃げ込む苦労が無くなったことで、ひと安心ではありましたが、「夫はどうなるのだろうか」と思うと、またまた不安と焦慮の気持ちで頭の中がいつぱいとなり、涙が止まりませんでした。

その夜から、現地民による不穏当な空気も流れて来ました。明日からどうなるのかという気持ちで脅えていましたが、数日後には会社から大きな麻袋に入った米が届きました。これで当分、命がつかるといふ安心感が出てきました。

八月十五日から十日ほど経った日、待ち望んでいた夫が帰って来ましたが、ぼろぼろの服装で二人の兵隊さんを連れていました。お人好しの夫は、先々のことも考えずに、日本本土から出征して来て、帰る家も無いという人を連れて来たのでした。でも、幼い子供二人で夫の帰りを首を長くして待っていた私にとっては、何よりも嬉しく、有り難く、心強いことでした。今まで張り詰めて

いた気持ちも、途端に緩んでしまいました。

やれやれと安心した数日を過ごしていたある日、突如現地民の暴徒が襲って来て、我家を取り囲んでしまいました。夫は、中国語で「女、子供を助けてくれたら家の中の物は全部渡す」と言ったよう、私は裸足のままで子供一人を背負い、一人を抱き抱えて、命懸けで隣組長さんの家に駆け込みました。夫のことも心配になって振り返って見ると、手を後ろにして縛られていて、その周りを棍棒などを手に手に振り回している暴徒が、騒いでいる様子が見られました。「これは大変だ！ 命が危ない」と思いましたが、助けに行くこともできずに、後ろ髪をひかれる思いで逃げ込みました。隣組の人たちも集まっただけで、心配してくれていました。数時間後に、夫が姿を現したので、びつくりするやら嬉しいやらで声も出ませんでした。

夫の話では、「大勢の暴徒から殴られたり、蹴られたりしていると、幸いなことに、近所に住ん

でいる日本人女学校の先生だった朝鮮の方が通る
かかり、『この方は、大変に良い方だから助けて
やれ』と言ったので、すぐに釈放された」という
ことでした。

この先生は林さんという人で、以前裏庭で収穫
した野菜とか、会社から配給を受けた菓子や、ブ
ドウ酒などを差し上げたこともあったので、この
危急の場を助けてくださったようです。今でも感
謝の心でいっぱい、お会いすることができたら
と思っています。

夫が連れて来た日本兵は、暴動のときに一番最
初に裏の窓から逃げ出して、そのまま二度と私た
ちの前に姿を見せませんでした。

あっちこっちで暴動が発生しているという噂が
流れてきて、だれも外に出ることもならず、様子
もさっぱり分からない危険な状況が続いていまし
た。

それから数日後、日本人会から回覧板が回って
来て、「軍隊に行っていた者は、小学校の校庭に

集まるように」と書いてありました。せっかく
戻って来たのに、どうしたものかと考え込んでし
まいましたが、夫はまじめに出て行きました。も
し出て行ったら皆殺しにされるのではないかと、
そればかりが頭に浮かび不安でした。

やはり、その日は待てど暮らせど戻って来ませ
ん。次の日もまたその次の日も帰宅せず、不安は
募るばかりでした。夫がどうなっているのかとい
う不安と、もう一方では、夜になると自動小銃を
構えたソ連兵が、日本人の女性を求めて探しに来
たり、腕時計とか万年筆とか貴金属とか、珍しい
ものを略奪に来るので、恐怖の毎日でした。

「マダム、マダム、ハラシヨウ！」と、大声を
発しながら一軒、一軒に入り込んで来るのは、本
当に怖いものです。水商売の人たちが犠牲になっ
て相手にしてくれて、本当にお気の毒なことと思
いながら、助けられていました。しかしその人た
ちも、毎夜の如く現れる鬼畜には耐えられずに、
とうとうよそに行ってしまいました。

次の日にソ連兵は現れたので、今度は自分の身は自分で守るしか方法が無く、私たち若い女性は、子供はそのまま年配者に預けて、奥まった家の押し入れの中に身をかがめて、息を殺してうずくまりました。侵入してきたソ連兵は、私たちが隠れている気配を感じたのか、押し入れに向かつて自動小銃を撃ってきました。私と肩を抱き合っとうずくまっていた人の肩を弾がかすめました。その瞬間は目をあけるもならず、ただお互いに抱き合うだけでした。幸いに狙いが外れて、弾は壁に打ち込まれました。本当に生きた心地がしませんでした。ソ連兵が立ち去る靴音を聞いて、恐る恐る部屋を出しましたが、皆さんも大変に心配していて、無事な姿を見て一様に安堵のため息をついていました。

私は、もうこんな所にはとてもではないがいられないと思ひ、会社に行こうと決心をしました。女、子供が外に出ることは、危険であることもよく分かっていましたし、周囲の人たちも心配して

止めてくださいましたが、毎夜このような危険で恐ろしい思いをするよりはよいだろうと、一人を背負い一人の手を引いて、わずかばかりの着替えを抱えて歩き出しました。気が張っていたので急ぎ足で歩きましたが、思うように足が動いていきませんでした。いつ襲われるかも知れない命懸けの行動でした。幸いにも何事も無く会社に着いた途端に、へたへたと座り込んでしまいました。会社にいた人たちも、夫のいない私たち親子を心配していて、親切に迎え入れてくれました。

大通りに面した会社のすぐ前には、三陽ホテルという立派なホテルがあり、ソ連軍将校の宿舎になっていました。ここにいる将校は悪いことはいないと社員の人たちも言ってくれたので、当分ここで落ち着けそうでした。粗末な食事でしたが、会社の人々が作った食事を頂き、終戦以来初めて恐怖心の無い夜を過ごしました。

後に聞いた話ですが、吉林市には終戦を迎えても、現役時代に「大和魂」をたたき込まれた関東

軍の精鋭部隊が、武装解除もせずに残っていて、惨めな境遇になった同胞を助けようとして、発砲したりしたことから治安が非常に悪くなり、日本人があちこちで殺されていたとのことでした。神の国と信じていた日本が、戦争に負けることなど想像もしていなかったことですし、そのような話を聞くと、またしても心細い思いがしてきました。

五 吉林での難民生活

ある日、大通りを靴音を立てて通り過ぎようとする一団がありました。日本兵らしいということ、急いで窓から身を乗り出してその一団を見ました。夫もいたと言う人がいましたが、一瞬のこと、私は見付けることができませんでした。私たち親子が、会社で世話になっていることを知ったならば、どんなに安心したことだろうと思つて残念でした。

夫のことについては、その後も何の消息も無く、「ソ連兵に殺されたのでは？」との情報も耳

にしましたが、私はそれには耳も貸さずに、一日をなんとか元気に生きのびることだけを考えていました。

そんな状況で過ごしていた折柄、私たち親子はたくさんに並んでいる社宅にお世話になることになり、以前から親しくしていた宮崎さんの家に入りました。宮崎さんも子だくさんだったので食糧不足で、そこで一緒に生活することもいろいろと大変で、一カ月ぐらいで移ることになりました。

山本さんから招かれていたので、そこにお世話になることにしましたが、お金も無く着るものも持っていない親子三人は、どちらにお世話になるにしても、非常に心苦しいことでした。

いつ引揚げが始まるのかも分からず、少しでもお金を得なければと考えるようになりましたが、女でできることはまず煙草売りでした。まとめて買った煙草の葉を、夜なべ仕事で細かく切り刻んで紙に巻いて巻煙草を作つて、それを昼間に売りに出るのでした。暴動に遭っていない人たちが、家

財道具や衣類などを売るためにできた市場に行つて、そこに集まる人を目当てに煙草売りに出るのでした。煙草売りも大変な重労働でしたが、売上げはわずかであまりよい仕事ではありませんでした。わずかばかりの売上げで、山本さんの家にお世話になることは大変に心苦しいことでしたが、山本さんは気持ちよく私たちを助けてくださいました。

お米に高粱を半分ぐらい混ぜた食事を食べるだけでも、大変な幸せでした。私たちは、まだ会社もあつたし社宅もあつて、守ってくれる人がたくさんにおられたのに比べて、北満の国境近くから、命からがら避難して来た人たちは、本当に大変で辛いことでした。

もうすぐ吉林地区の引揚げが始まるという話が、どこからともなく流れてくるようになったある日、いつものとおり煙草売りに出ているとき、私に声をかけてくれた中国人がいました。びっくりして顔をあげると、かつて夫の仕事上の知人

で、私の家にも来たことのある人でした。その当時は、現地人への物資の配給が少なくみんな困っていたので、まだいろいろな品物が豊富に手に入っていた私たちは、そのつど少しずつでも役に立つならばと、お土産代わりにいろいろな物を持たせていた人でした。

街頭で会ったときは、立派な服装をしていました。私に主人の様子を聞き、「幼い子供二人を抱えては、さぞ大変でしょう」と、親切に話しかけてきたので、暴動ですべてを失ったことを話すと、非常に同情してくれました。そして別れるときに、そつと私の手に金包みを握らせてくれました。知人の少ない土地で、しかも中国人から親切を受けようとは、考えてもいませんでした。

「困ったときには私のところに来てください」と言つて、名刺も渡してくれました。名刺には「吉林市水道・暖房同業公社、業務員劉電祥」とあり、住所・電話番号も書いてありました。逆境にあるときの親切で、嬉しさのあまり目頭が熱くな

りました。山本さんにもこのことを話したら、一緒に
緒になって喜んでくださいました。頂いたお金
は、山本さんに「何かの役に立ててください」と
言って差し出しました。これで私の気持ちも少し
は軽くなりました。

しばらくの間は、社宅街も危険なことも少なく
なって、比較的落ち着いた日々となりました。

主人の吉林支店の勤務は、二年足らずでした
が、皆さんはとても親切でした。そのときの親切
な扱いは、今になっても忘れることはありません。
その親切に助けられて、何とか越冬ができ、
遅い春がやって来るころになると、「もうすぐに
日本への引揚げ許可が出そうだ」とか、「ソ連に
連行された人たちも帰されるらしい」とかの噂
が飛び交いました。

六 照子の死

暖かい日も多くなってきたころから、長女の照
子がだんだんと衰弱してきて、煙草売りに出るの
も心配になってきました。社宅に残っている人

に、面倒を見てもらうようをお願いして出掛けて
いました。

ある日、私が戻って部屋に入っても照子の姿が
見当たりません。何かあったのかと胸騒ぎがしま
した。便所を覗くと、そこで動けなくなつて便器
につかまってしゃがみ込んでいました。便所に
入っても、体力が無くて立ち上がれないのです。
この姿を見て不憫で胸がつまりました。抱きかか
えて布団に寝かせましたが、笑顔も出ませんでした。
初孫として「蝶よ花よ！」の如くに大事にさ
れて、みんなからかわいがられて育ってきたので
すが、戦争に負けたということは、こんな小さな
子供にも過酷な目に遭わせてしまうのです。

煙草売りのとき、私のそばに寄つて来た中国人
が、背中におぶっていた次女を指差して、「この
子を三百円で売ってほしい！」と話しかけてきた
のにはびくりしました。うわさでは、生きるた
めに子供を売っているという話は聞いていました
が、まさか私にまでこのように話しかけられると

は、思ってもみませんでした。返事もできずに、ただ絶句するだけでした。しばらくして、やっと正気に戻り「絶対に、手離すことはしない！」と、言葉を丁寧にして断りました。その中国人は、それ以上の難題を言うこともなく立ち去りました。私を哀れと思つて声をかけたのでしょうか。

照子も、三月には四歳の誕生日を迎えました。が、日一日、一日とやせ細っていきました。何とかして、無事に日本に二人の子供を届けるまでは頑張らないと、と覚悟をあらたにしてみました。夫もどこかで頑張っていることだろうと、そののみが頼みの綱でした。

ある日山本さんの奥さんが、煙草売りをしている所に飛んで来て、「照子ちゃんの様子が変だからすぐに帰って！」と言われたので、慌てて家に戻りました。布団の中の照子を見ますと、身動きもせずに目をつぶったままでした。ただならぬ様子に、私もびっくりして気違いのようになって、

以前お隣にいた満鉄病院の女医さんのところに飛んで行き、「何とか助けてください！」とお願ひしましたが、その病院でも大勢の患者が列をなして診察を待っている有様で、とてもではないが家にまで来てもらえる状況ではなく、泣き泣き戻りました。

お昼ごろに、照子は泣く力も無いまま、敗戦の犠牲者の一人として、静かに永遠の眠りにつきました。たった一枚の布団の中で、親子三人抱き合つて小さくなって寝ていた毎日で、手足を伸ばして寝ることもなく死なせてしまったことは、悔やんでも悔やみきれないことでした。もつと何かしてあげることがあったのではなかったかと、六十年近くたった今でも涙が流れてきます。

すぐに会社の人々が、どこからかお坊さんと呼んで来て、丁寧なお経をあげていただきました。そして毛布に包んで、会社の人々が連れて来た日本人二人によつて、皆さんに見送られてどこかに担がれて行きました。お経をあげてもらえただけで

も、そのころはよい方だったのです。息を引き取ってから、たった三時間余りですべてが終わり、過去の人となつてしまいました。昭和二十一年六月二十五日のことでした。悪夢の中の一シーンのような、慌ただしくも悲しい出来事でした。

残った一歳の恵子は、絶対に日本に連れて帰らなければと、抱きしめる日夜でした。照子の葬られた場所を知ることできずに、夢遊病者のような精神状態になつて暑い夏を過ごし、肌寒さを感じるころになつて、今度こそは本当だという引揚げの話が人々の口にのぼるようになり、身分証明書のようなものを渡されました。

七 引揚げ

十月になると、帰国のための班の編成があり、やつと今度こそは本物かと思うと希望がわいてきました。それでも私は、心の反面に帰国したくない、このまま吉林に残りたいという気持ちも起きていました。亡くなった照子を、日本から遠く離れたこの寒い所に一人置いて私たちが帰国するこ

とは、気持ちの上からも許されないと考えると、複雑な思いでした。

しかし、「第八移送団、第十六大隊、第七中隊」と決まったことで、徐々に準備が始まり毎日が過ぎて行きました。大部分の社宅の人たちは、幸いにも暴動に遭つておらず、貴重品とか家財道具などは残っていたので、それを売つてお金に替えていました。しかし、着の身着のままの有様で社宅に逃げ込んだ私は何も持つてゐる物は無く、皆さんから頂いた少々の衣類があるだけで、準備などということはありませんでした。

帰国に際しては、一人当たり千円を持つことが許可されましたが、私にはそんなお金も無く、人様のお金を預かることになりました。引揚げは、母子家庭が優先ということになり、私は自分の気持ちとは裏腹に、とうとう皆さんと行動を共にすることになりました。日本人会から、葫蘆島^{コロトウ}經由で九州の佐世保に上陸するということが知らされました。

吉林駅から無蓋車に乗せられて葫蘆島に向かい、そこから引揚船に乗船しました。船内は、栄養失調の子供や衰弱してやせ衰えた老人たちで満員でした。船内で亡くなる人も続出していて、無造作に水葬にされているということでした。

佐世保に着いたときには、夢にまで見ていた日本の土をやつと踏むことができたという感慨からか、だれも言葉を出すことも無く、ただ黙々として静かに上陸していました。

乞食のようなぼろぼろの衣服に、汚れた荷物を担いでの上陸でしたが、長く苦勞を共にしてきた人たちは、嬉しそうにそれぞれの故郷に向かって手を振って別れました。

私たち四国に帰るグループは、尾道で一泊することを知らされましたが、日本に帰った安心感でぐっすりと休み、心のこもった夕食を頂きました。

八 懐かしの今治へ

翌朝、尾道から四国行き連絡船に乗りまし

た。尾道で大事に預かっていた千円を渡すと、お礼といって三百円を頂き、大変に嬉しく心強くなりました。三百円は当時の私にとっては大金だったのです。

今治に近づくに従って、「家は怎么样了か」とか、「祖母は無事でいてくれるか」とか、心配が頭をよぎりました。あれだけ世話をかけながら、旅順に移ってからも、何のお礼らしいこともしていなかったという反省をしつつ、玄関の戸を開けました。何の前触れもなく戻ったのですが、とても心配していたようで「よう元気でもんだ！」と同じことを何度も繰り返しながら恵子を抱き上げていました。照子が栄養失調で亡くなったことを話して、遺髪と爪の入った袋を仏壇に供えてお線香をあげました。

祖母は、高齢でしたが元気で、畑仕事もしているとのことでした。祖母の話ではついひと月前までは、祖母の一番末の息子一家が上海から引き揚げて滞在していて、賑やかだったと言っ

ていました。次いで、私たち親子二人がお世話になることになったのです。

戦後二年、まだ食糧事情の悪いときでしたが、祖母の手作りの温かい夕食を頂き、ようやく食事らしい食事ができました。いろいろな事を思い出しながら、尽きぬ話で夜も更けていきました。

ようやく落ち着いた生活をしているある日、大連から両親と妹が引き揚げてきました。祖母も、これで全員が無事に帰ってくれたと、非常に喜んで安心してくれました。しかしそれまでは、祖母一人の静かな日常生活だったのに、急に五人も家族が増えてどんな気持ちだったかと、後々思い返しては心の中で謝ったものでした。

夫の実家は静岡市ということは知っていました。が、一度も行ったことが無いので、私の実家を頼ることしか考えていませんでした。

畑ではさつま芋の収穫時期になりましたので、恵子の子守りを祖母に頼んで、みんなで畑に出ました。お米に混ぜると量も増えるので、有り難く

思いました。飽食の今の時代では、想像もつかないことでした。

上海から引き揚げてきた叔父一家は、家族も多かったので叔母の実家へ移り、その後には父母たちが帰って来たので、祖母の負担も少しは軽くなったことでした。毎日、仏壇に向かってお経を唱え、照子を弔ってくれましたし、父は、小さな木箱を作って遺髪と爪を納めてくれました。

しばらくすると、シベリアからの復員のことがうわさの如くに流れてきて、来春には帰国が実現するらしいことが耳に入ってきました。しかし夫はなかなか帰って来ません。

私も長く世話になつていけるのも心苦しくなつたので、アイスケーキ屋で働くことにしました。母が恵子の面倒を見てくれるので、安心して働きました。父も就職して、一応安定した日々となりました。

三カ月ぐらい経ったころ、シベリアから便りが届き「元気であるから心配しないよう、静岡にも

よろしく伝えてくれ」という簡単な文面でしたが、生きていることを知り、家族一同元気が出ました。

九 静岡に移る

昭和二十四年十月のある日、静岡から「一郎帰国した」という電報が入りました。家族一同で喜び合いました。仏壇にも手を合わせてお礼を申しました。

それからは、静岡に行く準備が始まり、祖母は恵子のために手織りの着物を作ってくれ、親類からは布団とか衣料とかをもらい、精いっぱい準備をして静岡に向かいました。煙の出る汽車に乗って長時間かけて静岡駅に着き、懐かしい夫に迎えられました。五年ぶりの再会でした。夫は、長い間の捕虜生活で、栄養失調で浮腫むくんでいて丸々としていました。随分と心身の苦勞があつたのだらうと痛ましく感じ、いたわりの気持ちでいっぱいでした。当然に恵子とも初対面です。照子を亡くしたことを謝り、小箱の遺髪と爪を見せ

ました。一同で改めて冥福を祈りました。

舅は、借家で友人から借りた歯科医療機器を使つてどうにか開業していましたが、両親と独身の弟二人、それに私たち三人では狭くて大変でしたので、早く独立することを考えていました。

二カ月後に東京での就職が決まりましたが、東京も住宅事情が極端に悪く、東京では主人の妹夫婦の家に同居していました。やっと勤めた会社にも二年ぐらいで解散し、また職探しが始まり、職業安定所に日参してやっとタクシー会社の事務職に決まりましたが、十年ぐらい勤めたころ、労働組合との賃金問題で会社が潰れてしまい、また失業しました。その間に三女が生まれ、生活も大変でした。静岡の両親も心配して静岡に帰ることになり、私も休み無く内職を続けました。主人も運が悪かったのか十年ぐらい経つと会社が潰れ、転々と職を変えて不安に満ちた戦後の生活でした。あの戦争、そして敗戦ということが無ければ、一応エリートの道を歩めたことと思うと、残

念でたまりません。

幸いに、二人の娘がそれぞれ良きパートナーと結ばれ、子供にも恵まれて幸福な家庭を営んでおり、高齢となった私たち夫婦の健康や生活を気遣ってしてくれます。何とか今日まで生き延びている、この幸福を感謝しているこのごろです。

夫は昨年十月に、動脈瘤が切れて三カ月入院生活を送りましたが、今は大きな変化も無く余生を送っていますし、私は狭心症の手術から五年が無事に過ぎました。加えて膝痛にも耐えながら、主婦業六十年を過ごし、今年も梅八キログラムを漬けました。何とか台所に立てることを生きがいとしています。

どうか世界中が、戦争の無い平和であること、何よりも祈っております。毎日、亡き照子にお茶を供えながら「吉林は、やっと暖かくなったでしょう」とか、「こんな姿にして御免ね」とか、仏壇に向かって話し合っています。

南北満州 北帰行

愛知県 三 澤 徹 志

一 生い立ちと家族

私が生を受けたのは、乃木將軍の詩で有名な金州城内であった。物心がついたのは関東州の東端にある貔子窩ひしかで、当時父は、日本の小学校に当たる公学堂の堂長をしていた。私は父の転勤によって旅順、そして最も多感な少年期を北満のハルビンで過ごした。見渡す限り山一つ無い大広野と、多くの白系ロシア人が住む国際都市ハルビンは、旅順とはまた異なる性格の都市であった。ハルビンで育って影響を受けた私の大陸的な気風は骨の髄まで染み込んでいて、古希を過ぎた今でも変わらない。

父母は明治の末期、郷里長野県上諏訪の農村で共に小学校の教員として働いていた。